

暮らしの広場

がん

克服へ

【81】

工藤 明敏

■乳がん編

局所療法の外科手術・放射線照射に対して、薬物療法は全身療法です。

針生検の結果を最適な治療につなげるには、初期治療として、局所療法と全身療法をどの順序で組み合わせると再発を予防できるかを考えなければなりません。

手術前薬物療法は、腫瘍が縮小するため乳房温存手術が可能で、薬物療法の効果を認



認できる利点があり、手術後薬物療法と同等の生存率

薬物療法

性質で組み合わせる

が得られています。

乳がんの薬物療法は化学療法(「抗がん剤」「分子標的治療薬」と「ホルモン療法」)に大別されます。薬物療法の組み合わせはがんの性質別で異なります。

抗がん剤には自分勝手に増え続けるがん細胞の増殖を止める作用があり、1種類で投与するほか、がん細胞への効果が異なる複数の薬剤を併用することが多くあります。

投与された抗がん剤は、血流にのって全身へめぐり効果を発揮しますが、がん細胞と同時に正常細胞にも影響を与えるため、副作用もあります。

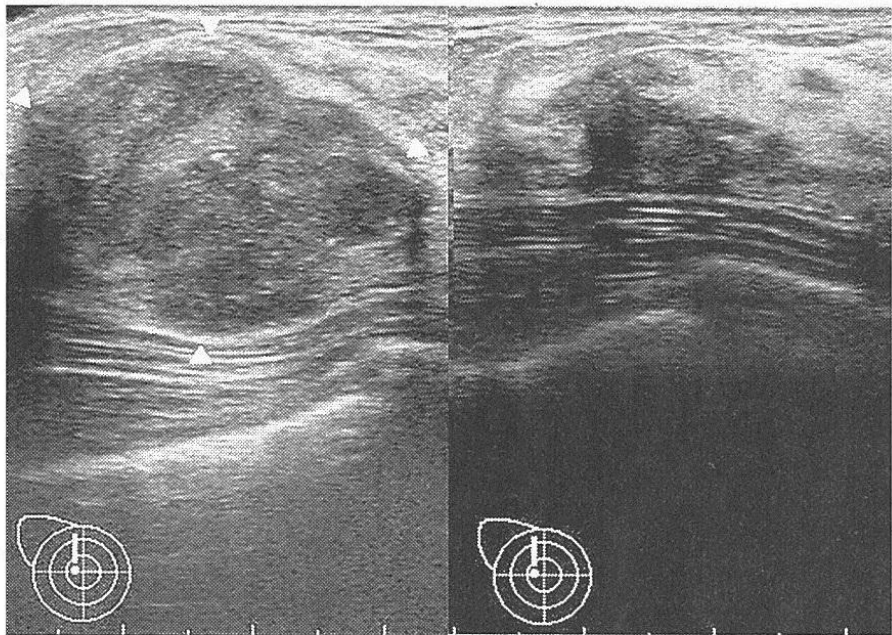
正常細胞の中でも特に細胞分裂が盛んな骨髄細胞や、消化管細胞(口・胃・腸の粘膜)、毛母細胞に影響を及ぼし、感染症、出血、貧血、下痢、吐き気、味覚変化、脱毛、皮膚炎、爪の変化などの症状が現れます。

乳がんで標準となる薬は、アンストラサイクリン系とタキサン系です。タキサン系にはアルコールが含まれる場合が

あるため、投与当日は車の運転をすると酒気帯び状態となります。注意してください。

分子標的治療薬は、がん細胞が増殖するために必要な体内の特定の分子を狙い撃ちして、その機能を抑える薬剤です。

転をすると酒気帯び状態となる糖タンパク)を持っている場合、増殖に必要な栄養物を取り込んで盛んに増殖します。分子標的治療薬のハーセリンはHER2タンパクに特異的に結合するため、がん細胞は栄養を取れなくなり増殖が抑えられます。がん細胞



乳房エコー。▲で囲んだ部分が化学療法前の腫瘍。化学療法後(右の画像)、腫瘍は消失した

乳がん細胞は、HER2タンパクを増やして増殖する。抗がん剤はがん細胞の増殖を抑制する。閉経前後で薬が違います。抗がん剤に比べて副作用が軽く、生活の質に大きな影響を与えません。

ホルモンの副作用 ①ほてり・のぼせ:血液中の女性ホルモンが減少し、体温調節がうまくできなくなる②子宮体がんの危険:ホルモンのタモキシフェンは危険が増加する③骨粗しょう症:骨密度が低下し、骨折を起しやすい。

(阿知須共立病院診療部長、外科部長)